

齊藤日出治著

## グローバル資本主義の破局に どう立ち向かうか

——市場から連帯へ——

〈河合文化教育研究所、二〇一八年四月、一三〇頁〉

グローバリゼーションの波が世界を怒濤のように襲い、弱肉強食の渦があらゆる国々を支配する時代となったことを否定する論者は少なく、本書もまた、それらと同じ目線で現代資本主義の諸問題を抉り出し、改善策を導き出すという意図を持っている。

本書はそうした立場から、グローバリゼーションを批判し、他方で、そこからの「脱出」（以下、カギ括弧は著者の言葉）を図る過程で生まれる「人道的介入」「社会的連帯経済」に望みを託すという点では、批判と改善の双方を織り込んだ書である。

著者によれば、グローバリゼーションは市場や貨幣、金融に現れた「暴力」であり、「破局の生産装置」であり、世

界を「破局」させるものだという。このようなグローバリゼーションは突如として現れたものではなく、人間社会が歴史的に積み上げてきた「市場取引」、あらゆるものを「テーマパーク」化させてしまう「商品化」に淵源がある、とする。

本書は、経済学的には限られた概念のグローバリゼーションを、現代資本主義の批判に敷衍するという点で、非常に広角的な見地に立っていると思う。

著者のグローバリゼーションについての一つの理解、すなわち世界経済のアメリカナイズを進めるものだという見方に、評者は基本的には賛成である。

評者の見方では、アメリカ資本主義はもともと自由競争を原理とし、その結果のほとんどを是とすべきだとする通念のもとにある。豊かなものと貧しき者の併存や所得格差は公正な営みである自由競争の結果であり、それを受け入れることが社会の良心というものだ、という通念がアメリカ資本主義の本質であろう。

しかし、その通念を受け入れるべき人間社会に、もともと自由競争の前提条件たるイコール・フットイング（出発点の公平、判断・評価の平等と独立性）が保障されているかどうか、真剣に顧みなければなるまい。それなしに暗黙裏に理念だけを尊重したところで、現実には溢れかえる諸問題はなくなるはずだ。

さて本書は、世界を破局させるグローバリゼーションからの「脱出」の方法として、「国家」を超えた「社会的連帯」を強調する。

この場合の「国家」とはなんであるか？ 日本国家を超えるとは、具体的にどういふ動態的なイメージを抱けばいいのだろうか？ 「連帯」の仕組みや、それを形成するための担い手はだれをイメージすればいいのだろうか？ こうした疑問を抱えつつ読んだのであるが、著者の深い知的格闘の跡を感取させずにおかない書でもある。

（高橋五郎）